日本の学生伝道

片岡伸光

序

筆者は、キリスト者学生会の学生伝道に従事するものである。本論文では、伝道団体に属する者の視点から、過去・現在・将来の日本の学生伝道を大雑把に概観してみたい。紙面の制約などから、伝道団体の視点に集中している。用語で、学生伝道という場合、本論文では、主として大学生の伝道を意識しているものと了解していただければと思う。

一、第二次世界大戦以前の日本の学生伝道

プロテスタントの日本宣教の歴史をふりかえると、その中で学生の伝道がもつ広がりの大きさ、意義の重さに今更のごとくに驚かされる。ことに、その当初に限れば、日本プロテスタントの歴史は、学生伝道をもって始められたとしても過言ではない。勿論当時は、今日のような学制の整った学校ではなかった。[1] 山森鉄直は、『日本の教会成長』

の中で、最初のプロテスタント教会である日本基督公会が、既に受洗していた二名と、[2]創立日である一八七二年（明治五年）三月十日に受洗した九名の学生たちをメンバーとして始まったとしている。[3]その九名は、静岡・松山・伊勢などから洋学を学ぶために、宣教師のもとに集まった人たちであった。[4]こうしてプロテスタントの教会史もまた、学生伝道と深いつながりをもって出発したといえるのである。

よく知られているところでは、いわゆる熊本バンドは、熊本洋学校長として招聘された砲兵大尉ジェーンズ（Captin I. L. Janes, 1838～1909）のもとに集まり指導をうけた学生たちによるものであった。彼らのうち三十五名は、一八七六年（明治九年）一月三十日、熊本郊外の花岡山にて「奉教趣意書」を朗読し、血盟した。[5]

札幌バンドでは、北海道開拓のために設立された札幌農学校に招聘された、陸軍大佐クラーク博士（Clark, W. S. 1826～86）の指導下にある学生たちであった。わずか八カ月で札幌を後にするクラーク博士が「耶蘇を信ずる者の契約」を作ったところ、一期生一六名全部が署名する程、その影響力は大きかった。第二期生の中に、内村鑑三や新渡戸稲造がいたのである。[6]

ジェーンズもクラークも、いわゆる宣教師ではなかったが、生きたキリスト教信仰をもつ者として、多大な影響を与えたのである。

横浜・熊本・札幌以外の都市でも、宣教師たちは居住可能なところで働きを開始し、こうして、日本のプロテスタント伝道は始められていった。小沢によれば一八五九年から、一八七三年の間に日本に派遣された宣教師は、宣教師夫人も含めて六十名を数える。[7]また一八五九年から一九一二年までに、日本に宣教師を派遣した宣教団は三十をこえていて、その大半はアメリカからのものである。[8]

こうして派遣された宣教師のもとに集まってきた人たちの中から、回心してキリスト者になる者がおこされていったのである。それらの人のほとんどは、若い士族であった。山森は福音がまず現わされたのは若い士族であった理由として次の五つをあげている。

(一) 江戸幕府から明治政府に体制がかわり、古い価値観を喪失した者たちが新しい価値観を洋学の中に見い出そうとした。

(二) 聖書が日本語に翻訳される以前は、当時の知識人である彼らが、漢訳聖書を読むことができた。

(三) 彼らは日本が早く西欧に追いつき、国の中の国たる大望をもつ人たちであった。

(四) 宣教師の高潔な人格と訓練された生活は、「侍」の背景をもつ人たちに呼応する部分が多く影響をうけやすかった。

(五) 彼らが社会の伝統に最も束縛をうけにくい人たちであった。[9]

これらのことから、日本伝道の出発点では、洋学に活路を見い出そうとする若者たちが、宣教師のもとに集まってきて、そこで福音との出会いに導かれていることがわかる。宣教師のもつ信仰・思想・人格にふれて、青天の霹靂を感じたのであるが、先ず福音のメッセージそのものが求められたのではなく、若い士族たちの必要に応えるうちに、接触が起こって、福音が伝わっていっているところが注目に価する。今日でいえば学生層にあたる人たちが、最もキリスト教に応答しやすい人たちであったのである。学生伝道にとっては、学生が、新しいものに応答しやすいということが、大きなポテンシャルなのである。

一九七三年（明治六年）二月二四日の切支丹禁制高札撤廃以前にも少しはみられたが、以後は、おし寄せるように宣教師が派遣されキリスト教主義学校が設立された。このキリスト教主義学校が日本伝道に及ぼした影響は非常に大きい。山森は一八八二年～一八八九年を西洋への開花と名づけ、この時代の回心者の大多数が、ミッション・スクー

ルを通じてのものであったことを指摘する。[10] この学校アプローチは明治の学生伝道の根幹をなしているのである。このようなキリスト教主義学校は、明治四四年までに、約百校が設立されている。[11]

先に日本基督公会設立にも、学生伝道がかかわっていたことをふれた。以来設立された日本の教会が学生に伝道をしていったことは言うをまたないのであるが、本論文では、割愛して、あといくつかの学生の間に起こされたキリスト者学生運動を紹介して、第二次世界大戦以前の学生伝道をしめくくりたい。

ＹＭＣＡは、一八八〇年（明治一三年）五月四日、京橋教会（銀座教会）にて発会式をあげている。ＹＭＣＡは、「青年をして生けるキリストに直面せしめる」ことを目的として、世界各国ですすめられた運動で、日本でも青年伝道を第一義とし、直接伝道をすすめていった。[12] 学生ＹＭＣＡも都市ＹＭＣＡとほぼ並行的に始まり、一八八八年（明治二一年）一月のジョン・Ｔ・スウィフトの来日とその活動をもって確立をみた。[13] 一八八九年（明治二二年）六月二九日～七月一〇日の第一回夏季学校には四六二名の出席を数えている。これには全国の二八の学校から学生たちが集まった。この中には一〇〇名近い女子学生も含まれているのである。[14]

ＳＣＭは学生ＹＭＣＡから生まれた運動であるが、キリスト教の社会化をめざし、過激に教会批判などをした。一九三一年（昭和六年）には、ＹＭＣＡから離れて自主行動へと移行した。[15] 学生は本来多感で、柔軟に新しいものを吸収し行動していくことのできる存在であるが、教会は学生程急進的にはなれず、しばしば歯車がかみ合わなくなる。それとともに、伝道は魂の救済のことでありながら、その裾野は限りなく広いものであることも知らされるのである。信仰をもつ学生たちは、入信前も入信後もさまざまな他の価値体系や思想のチャレンジをうける。キリスト教は伝道のわざに励みつつ、同時にそうした問題に答を用意していかなければならないのである。ＳＣＭは建徳的な行動をとれなかったかも知れないが、教会もその時点で事態の何たるかを把握できなかったのである。[16] 学生伝道は、他の

伝道同様、キリスト教界が総力をあげてとりくむのでなければとうてい果しえない使命であるのである。

共助会は森明のまわりに集まってきた学生たちによって始められ一九一九年（大正八年）のクリスマスに帝大共助会が組織されている。「祖国日本の救いを願うがゆえに、青年学徒にキリストの十字架の福音を与うるは共助会の第一の使命である」とされているように、献身の意にあふれた学生たちの集団として成長し、一九三二年（昭和七年）には五大学でその交わりがもたれている。[17] この群から、熱河宣教で活躍した宣教師がおこされている。このように、学生時代に信仰に導かれる者は、その生涯を神にささげる歩みをする大きな可能性を秘めているといえるのである。[18]

無教会運動による聖書研究会が、各地の大学内でもたれたこともよく知られているところである。

このような学生自身が参与し、活動する運動は、諸教会の学生伝道の働きとともに、第二次世界大戦の学生伝道史をかざっているのである。これらから、学生は、日本において福音に最も応答しやすい人たちであったので、様々な働きが学生伝道を出発点として始められたといえるのである。

二、学生伝道の意義

長年、日本キャンパス・クルセードを通じて、大学生伝道に従事した新井宏二は、一九七四年六月、京都にてもたれた日本伝道会議の分科会「学生伝道」の発題として「学生伝道は、後からでは福音をとどけることの困難な将来の指導者層にとどくことのできるものである」と語った。大学生伝道は、確かにそのようなポテンシャリティーをもつものであるといえる。

また元フィリピンＩＶＣＦ[19]総主事でかつ元ＩＦＥＳ[20]（国際福音主義学生交友会）東アジア地区副総主事のイザベロ

・マガリトは、かつて、「私は、この地域の学生界の中から、真に献身したところの明日の指導者が誕生してくることを夢みる」[21]との学生伝道のヴィジョンを語った名文を残している。今日、フィリピンの政変の中で、フィリピンIVCFの主事たちは、「明日の指導者」のところを、「明日の下僕」と書き換えたそうであるが、そのいわんとするところは同じで、学生伝道はそれほどの可能性をもつものだということが表明されているのである。すべての人が、キリストに招かれているのであるが、キリスト者となった後に、他に影響を及ぼすことのできる人にまずとどこうとする、戦略的見地から学生伝道をとらえようとするものである。ふつう学生伝道はこのような見方からとらえられることが多い。このことは学生時代は、生涯の進路を決めていく時でもあり、信仰的見地から進路を決めやすい時期であることとも関連する。

先の新井発言は、学生時代は、福音に接する時間的な余裕がある好機であるとの、もう一つの見解が含まれている。一億総働き蜂の観のある、就職が全時間献身であるような日本社会で、じっくりと福音にふれる機会は他にはないことがその背後の事情としてはある。ここでじっくりというのは、一人の人がキリストの言葉にふれ、聖書の御言葉をうけとめて、それに全身で応答するのには、それなりの時間がかかるということである。ことに、日本のように聖書知識をもたず、神概念がない国では、一度の決断は次のステップにはなっても、それでキリスト信仰を全体的に了解したことにはならないのである。多くの場合は、キリスト者の人格や発言、伝道活動にふれて、あるいは自らで聖書や信仰書にふれて、求道の道が始まり、ある期間の学習期をへて後、信仰の決断へと導かれる。その期間には入信のために必要な基礎知識を獲得するとともに、疑問や不安がとりあつかわれるのである。信仰は全人格のことであるから、ことに信仰をもつ上での疑問や不安はとりのけられるのに時間がかかることも少なくない。比較的早期に決断に導かれた人であっても、後に学習期がくるだけのことであり、ことがらは同様である。そのような期間は、学生

時代が最適であるというのが新井発言の第二の点である。

さらに新井発言のもう一つの大切な要素としては、学生時代が一人の人の一生からみて、最も福音を受容し易い時であるということである。発達心理学では、大学生時代は青年後期にあたり、依田新は「青年から成人へのこの最後の過渡期において、外界と内界の調和、主観的態度から客観的態度への移行、思考による感情の支配が完成される」最後の発達段階にあるとしている。[22]青年前期は内面に向かい、後期は外界とのバランスがとれる時期で、この両方の時期が伝道では絶好期であるといえる。信仰は知・情・意・霊にわたる全人格的なことがらであるのだが、少なくとも心理学的見地からは、青年後期以降に根本的変化をむかえることは困難である。いってみれば、大学時代は、影響をうけたり、かえられたりしやすい最後の時期であるのではなかろうか。

また社会的にみても、大学生時代は、社会的利害関係から自由になり易い最終的な時期であるといえる。[23]山森論文にみられたように、社会的、伝統的束縛の少いものがキリスト教に入信し易いという明治時代プロテスタント宣教史の特徴は、今日もまた真なのである。逆にいえば、学生伝道は日本伝道の鍵をにぎる突破口的可能性をもつのである。ある地方都市の牧師は、大学生のキャンプに出席した後、「あの純粋で素直なみことばへの反応、これで大学生伝道をやる人はやめられないのですね。」と語った。これは大学生が他の年令層に比較して福音への応答が素直であることを物語るものである。

三、第二次世界大戦以降の学生伝道

これまで見てきたように、学生伝道は、しばしば戦略的にとらえられてきたのであるが、ここで簡略に、第二次世

界大戦以降、日本で大学生伝道に専門的にとり組んできた団体等の働きを概観することとする。ここでも、各教会、教派が行ってきた学生伝道に関しては、資料も不十分であり、紙面の都合もあるので割愛することとする。

大学生伝道は、学生自らの運動としてとり組むものと、学生を対象として専門者が展開するものとにわけることができる。前者では、ＹＭＣＡ（ＳＣＭ）、キリスト者学生会（以下ＫＧＫ）等があり、後者は、キャンパス・クルセード、国際ナビゲーター等がある。

学生ＹＭＣＡ・ＳＣＭは戦前からのものであるが、教派主義にたたず、エキュメニカル的活動をしてきている。一九五〇年代には伝道的姿勢も保たれ学生も多く集ったが、[23]六〇年代、七〇年代には、社会運動の参与がそれ以上に強調され、またそれを支える神学的背景も幅広く多様であったことから、共通の基盤を失い、弱体化していった。

日本基督教団は、一九六一年一月に、「教団として固有の学生組織をつくらない」ことを決め、ＳＣＭ・学生ＹＭＣＡ・学生ＹＷＣＡを支援することを学生伝道委員会の基本方針としてきている。それは、「主が一つであるように、主のからだ、主を証しする共同体も一つでなければならないという、キリスト信仰の今日的自覚にもとづいている」とエキュメニカル運動的視点から出ていることとされているのである。[24]

しかしながら、学生であり主体性があれば、その運動の指導権をとれる構造であるので、様々な神学・思想がそこにもちこまれる構造をもっており、[25]第二次世界大戦以前もそうであったように、[26]社会とのかかわりの中で先鋭的問題がもちこまれ、能力をこえた問題に対応しようとする時、共通基盤をじっさい的にもつことは困難になったのである。学生が主体的に活動する時、はかりしれない力を出すことができるとともに、このような危険をいつもはらんでいるものでもある。

とはいえ、学生ＹＭＣＡ・ＳＣＭがもっている社会的視点や、社会の中にある現実の問題ととり組む中で、キリスト者の証しをしようとする姿勢は評価できるものである。この場合、そうした方向性に問題があったというよりは、学生ＹＭＣＡやＳＣＭの中で信仰の相対化がおき、社会参与自体が自己目的的になり、土台であり出発点である信仰[27]が第二のこととなっていったことに問題があったのである。学生団体は他の団体や教会以上にその精神を伝達することが困難なのである。

ＫＧＫは、一九四七年早稲田大学において尾山令仁らが始めた学内祈禱・学内伝道活動を出発点とし、[30]他の地区や大学にひろがっていった、[31]福音主義キリスト者学生伝道運動である。一九五六年にはＩＦＥＳに[32]加盟して国際的交流をもっている。この運動は学生が学内でキリスト信仰を主体的に証しすることを目的としている。そのために、「静思の時」を強調し、キリスト者学生の信仰が確立していくことをその活動の根幹としてきた。活動としては、学内で祈禱会を開き、聖書研究活動等を通じて福音を伝えようとしている。

ＫＧＫは、六条からなる信仰基準をもつことをその特徴としている。[33]超教派であるのに信仰基準をもつことが批判されたりもするが、それは学生運動体としてよりは伝道団体としての自覚からきているものである。

キャンパス・クルセードは、ビル・ブライトに与えられたヴィジョンにもとづいて始められた、学生を対象とした伝道団体であり、全米はもとより、全世界の学生伝道を手がけ、宣教の大命令をになうことをその目的としている。[34]ビル・ブライトによれば学生は、次の理由で、極めて、戦略的可能性をもつ伝道対象であるのである。

㈠ 学生は、至上命令の成就を助けるには、最高の人的資源である。㈡子供を別にしては、福音を最もよく受け入れるのは学生である。㈢学生は、何ものにもじゃまされず、自由に、キリストのために生活を投資することができる。㈣学生は、真理をよく受け入れるし、賢明な決断を下すまでに十分成熟している。㈤今日の学生は、まちがいなく、あらゆる分野でのあすの指導者である。㈥学生は、学生にすぎないが、影響力を増しつつある。㈦たくさんの都

市や外国からきた学生たちが、大学では大きなグループに集約されている。[35]

この団体は、その目的を大宣教命令の成就としており、生けるキリストを伝え、キリストの弟子を造り、地域教会に奉仕することをその理念としている。日本では一九六二年二月より働きを開始し、今日に及ぶ。「四つの法則」とよばれる簡便な個人伝道法を駆使し、「T・C（トランスファラブル・コンセプト＝伝道可能な概念）」や「クリスチャン成長のための十段階」などの訓練プログラムを有する。[36]豊富な資金力を背景に巨大な伝道キャンペーンを計画してきた。[37]

国際ナビゲーターは、ドウソン・トロットマン（一九〇六～一九五六）を創始者とする伝道及び訓練団体である。もとは船員に対する証し、伝道から出発したのであるが、後に学生伝道団体へと転じた。この団体の特徴は熱心な伝道とともに、次の伝道をする人を育てる訓練プログラムの強化にある。[38]フォローアップという概念を伝道に連続させて開発・発達させたのもこの団体による大きい貢献である。マン・トゥ・マンによって、自らに受けたことを次の人に伝えることを重視する。クリスチャン→弟子→弟子づくりをする人→弟子づくりをする人をつくる人へとの上昇が目ざされた訓練である。

日本での働きは、一九五一年以来前史的段階をへて本格的には一九五九年からで、最初社会人伝道をめざし、一九六五年東京にて学生宣教を開始している。今日、山形・仙台・宇都宮・東京・静岡・大阪・京都・神戸で働きがもたれている。[39]

その他、ユース・フォー・クライスト、ユース・ウィズ・ア・ミッションなどが超教派の学生伝道として働いたが、詳しくは省略する。

お茶の水学生キリスト教会館は[40]一種の学生センターとして、超教派学生伝道を展開している。これらの学生センターは、[41]これまで述べてきた団体が、キャンパスでの活動をしてきているのに対して、通常は大学の近くに建てられたセンターを中心に学生伝道の働きをすすめている。これらの多くは、外国ミッションによる働きによって、日本の学生伝道の拠点として設けられて、教会として自給をめざすなどの他は、経済的基盤が不安定で、また学生の人脈には浮沈があることから、継続していくことはやさしくない。[42]

その他、やや特殊ではあるが、仙台の宮田光雄の一麦寮、コーウィン宣教師のクリスチャン学寮（ティラナス・ホール）は、[43]生活をともにするものとして、ユニークな学生伝道の働きといえる。[44]多くの犠牲をともなうが、着実に人材を育ててきている。

四、地方教会と超教派学生伝道団体

大学世界への伝道を考えると、その構成員である教官、大学生の出身地、居住地の広がりは、中学・高校等に比較して、きわめて広い。大学によってその広がりは較差があるものの、一地方や教派でカバーしてしまうことはできない。また学生は卒業後、就職などで各地に分散していくケースも多く、大学生伝道を通じて救われた者も、全国の教会とよい関係をもつのでなければ、信仰を続けてゆくことは難しいのである。だから大学近くに、教会が存在する場合でも、教派をこえた協力が、学生伝道にはどうしても必要と思われる。

以上のような地理的必然から、大学生伝道団体は超教派もしくは教派の協力として働くことによって、よい働きをすることができるのである。

超教派で働く場合、各教派のもつよい伝統を吸収し合えるよさ、[45]また日本の伝道のために、超教派で協力するとい

う良い経験が与えられる長所がある。

反面互いの違いや、自らの立場を知らない者がそのような交わりに入ると、混乱させられてしまうことがないわけではない。超教派の理想は、各自が自らの所属する教派を自覚的な自らの立場として確信した上で、他の教派を神の恵みの異なるあらわれとしてみるときに成り立つものであるが、大学生は、その途上にあって、しばしば揺らぎやすい。深い自覚のないままに、教派を往来する人が生じると[46]、超教派活動自体が危機にさらされることが起こってくる。

しかし、学生伝道に限らず、日本の伝道はまだまだこれからであるのだから、このような障害を何とかのりこえ、各教派・教会はゆるされる限り協力してこれにあたらねばならないのではないだろうか。大学生伝道は、これからの人たちに福音を伝え、訓練するのだから、自らの教派・教会を愛し、その自覚にたちつつ、各領域で他教派・教会の人と柔軟に協力できる人を育てていかねばならない。エキュメニズムは自覚的信仰をもたないで、もしくは相対化して一致を求めたところに無理があった。超教派は自派にしっかりと立った上ですすめられていくべきものなのである。[47]

先述の地理的ひろがりの他に、超教派にて学生伝道をする利点は、学生伝道は、四年ないし六年・短大の場合は二年を周期として展開され、継続性をもつことが大変難しいものであるが、それを多少ともカバーして、大学世界に継続的に証しをもつことができることである。大学では、ゲリラ的活動は別として、外からの宣教活動は拒否されるが、[48]大学内にいる者は自主活動としてこれをすることができるのである。

さらには、教会は、本来全年令層・全社会的階層による群であることから、大学生のみに焦点をあわせ、集中することは普通の場合困難である。教会は経済的自給を要請されるから、投資しなければならない学生伝道に専念することは至難である。東京の大学町で長らく伝道牧会に務めてきたある牧師は「一時は百名を越える大学生が集っていた

が、その教会の歩みは、急流の上をいかだでいくようなものであった。」と語る。単に経済的なことのみではなく、軸となる人が育ったかと思えば転出していく動きの早さ、大きさに、落ち着いた教会形成をしにくかったことをさしての発言と思われるが、学生伝道の一面をつく言葉ではある。

しかし、一つの教会が、これにとり組むことは困難でも、少しずつの協力が教派・教会をこえてなされ大学界伝道がすすめられるならば、日本の教会は前進するに違いない。筆者の団体では、「超教派の伝道団体は教会に仕える下僕であるのだから、各教派が十分に成長した暁には、自然消滅すべきものである」と教えられてきた。一面の真理をつく言葉であるが、今なお道遠く、そのいわんとする中心的なことがらを謙虚にくみつつ、今は、尚協力の必要な時代にあるといわねばならないと思わされている。

そこで、教会と伝道団体との関係については、あらゆる努力が払われて、よい協力関係がもたれるようにしなければならない。ことに大学生伝道においては、救われた信仰者はできるだけ早いうちに地方教会に結びつけられる必要がある。大学生時代の交わりがいかに甘美であっても、伝えられる福音のメッセージは生涯的なものである。信じた者はキリストの体なる教会の一員となり、地上の可視的教会の一員とされるのが神の御計画である。したがって主の教会には、大学生も社会人も等しく主の恩寵による、信仰による全年令的全階層的な地方教会の中に一人一人は組みこまれていかねばならない。[49]

大学生伝道団体に起きやすい危険は、大学生信徒のゲットー的交わりを形成してしまうことである。伝道は交わりなくして、単に理論をかざしてすすめることはできない。正しい使信とその使信を生きている交わりにふれる時、人は心を開き、その仲間となり、信仰の道を選びとるようになる（ヨハネによる福音書一三章三四～三五節）。しかし、その交わりは、地方教会の一員となることをさしおいたものになりやすい。大学生同志の交わりの方が、問題意識を

共有しやすいし、交わりのための共有の時間をとりやすい。信仰に入ったばかりの者は、たしかにそのような交わりによって育てられるのであるが、その交わりに終始すると、地方教会の一員として育てられることが後退して、大学時代はまだしも、卒業後社会人となってから教会生活を確立することが困難となり、信仰生活に破たんをきたすことになるのである。

学生は、学力や知力等、均質な層であるので、訓練など効果的にほどこすことができる。また伝道団体はふつう、教会に比べて、す早く行動するので、伝道団体は、学生が教会と歩調を合わせられるような配慮が必要である。[50] 学生伝道団体内の交流に終始することは、学生時代にしかできない信仰生活をおくる危険性があることを知っておかねばなるまい。

神戸で学生伝道をしてきた国際ナビゲーターの記録によれば、[51] 一九六八年～一九八〇年秋の一二年間で信仰に導かれ卒業したクリスチャン五五名のうち、調査の時点で信仰生活を続けていない人は一三名であった。信仰を離れた主な原因は、㈠未信者との結婚（女子五名）。㈡信仰が自立するまでに成長しておらず、宣教師や主事との交わりがなくなると共に教会にも行かなくなった。㈢学生時代にもあった世俗的な考え方が社会に出てより顕著になった。㈣学生時代と社会の生活との間のギャップから疑問が出てきた等となっている。こうした傾向はどの学生伝道団体にもみられるものである。交わりは、現実を回避するためでなく現実にたち向かうものであらねばならないのである。

地方教会はまた、大学生が大学という一つの世界におかれていることを理解していく必要がある。大学生キリスト者は、地方教会の一員であるとともに、彼らは主によって大学に遣わされている人たちであることを知って、大学内での証しのために彼らが立ち上るよう励ましていかねばならない。というのも大学生に限らず、今日の都市生活においては、所属する教会のある地域と、仕事などでふだん生活する地域は異る場合が多く、その両方での宣証にキリスト者は召されているからである。

大学生伝道団体は、福音宣教の使命を委任された教会の枝として、まかされている領域の伝道に務むべきである。長島幸雄は、歩調を合わせた協力を訴えた。[52] そのためには両者の信頼関係が深められ、情報交換などの具体的協力が急務である。[53]

五、これからの日本の大学生伝道のために

㈠現状

一九八〇年度の文部省統計によれば日本には、四四六の四年制大学と五一七の短大が存在する。[54] 四年制以上の大学生の数は、一八四万人（男子一四三万人、女子四一万人）で、短大生は三七万人（男子四万人、女子三三万人）である。[55]

このように干近くもある大学や短大のうち福音的な学内伝道のあるグループはその三分の一にもみたない。[56]

同じ一九八〇年に同年代人口（十八才）の約三八％が短大・大学に進学している。この単純な進学率そのものは、一九七六年の三八・六％をピークに次第に減少してきており、最新の一九八六年の統計では、三四・七％にまで降下している。しかしながら、この数字には、浪人を含む進路未決定者（五・五％）や近年急増中の各種学校に進学する者（一四％）は含まれていない。[57] それらを合わせると、五割を越す者が第三次教育にいるわけで、まさに高度の高学歴時代なのである。終戦直後の大学進学率は不明だが、一九五五年の一〇・二％に比較しても、いかに大学進学が普及したかがわかるのである。

このことは、マーチン・トロウが『高学歴社会の大学』で指摘しているように、アメリカがたどってきた道であり、日本はそれに追従しているような形である。ヨーロッパ諸国でも同様な傾向がみられるが、アメリカや日本ほど急なものではない。それでも、たとえば、英国では、その名称の変更からも伺えるように総合大学中心の働きから、単科大学もその視座に入れざるをえなくなったほどである。[58]

ところがアジアでは、IFESの東アジア地区大会を通じての交流などでうきぼりになることであるが、日本と比較して、ごく限られた人が大学にいく。彼らはエリートとして、社会の指導者の卵であり、国家意識によりめざめていたりする。

それはともかく、今日、日本における大学生伝道は、一部のエリートないしは知識人の伝道と考えるよりは、大衆伝道の範囲で考えることが必要である。

かつて、英国のIVFやアメリカのIVCFなどの運動がおこされた頃は、学生はいわゆる知識人の卵としての学生であり、国家・社会の指導者層予備軍としてのエリートたちであった。また大学は、全寮制的共同体、もしくはそれに近いものであり、教授と学生が人格的にふれ合うような形での大学であり、そのために大学での教育の影響をうけやすかった。今日の都市で通学タイプの大学では、出会いやふれ合いも点と点で、それほど大学での影響もうけないといわれる。自ずと伝道方法もそれなりの対応が必要なのである。

日本の大学も第二次世界大戦以前は、古きよき時代的なところがあったが、今日では、大学は社会の要請に応えて膨張したのである。[59]それにともない、学生の大学に来る動機も、真理探究から学位取得、そして職業技術資格取得と変遷している。今日では、大学で学ぶかたわら、英文タイプ・コンピューター・英会話などの専修学校に通う者も少くないのである。

しかし、この高度大衆化した時代の大学においては、学生伝道はこれからの国民の半数にとどく可能性のある伝道であるといえなくもない。今は、一人二人のエリートを追い求めるにとどまるよりは、それを含めて、キリストに本気で献身してあらゆる世界に、分野に、職種に出ていく人を学生界の中からとらえる時期である。単に戦略面からとらえられがちな大学生伝道を、一人一人の魂を大切にされた主イエスのスピリットに習い求める伝道へと向かうチャンスでもある。そのためにも、日本の教会と各学生伝道団体がより力を合わせて、これからの世代の人たちである学生に福音を伝えていかねばならないのである。

これまでみてきた、大学の社会構造的変化の他に、大学生の意識の変化も注意深くみておく必要がある。

今日の学生は、学歴社会にあって、小学生時代から大学受験のための備えを迫られてきた人たちである。また彼らは、大学卒業後は社会の要請があることを十分に承知している。したがって、大学時代くらいは、自分のしたいことをして、本来の自分なりの生き方をしたいという要求がきわめて強い。「モラトリアムの時代」などといわれるように、自主留年や明確な計画をもたない大学院への進学などが増加しているが、それだけ納得のいく進路決定を時間をかけてしたいということなのである。青年後期は自己確立の時期といわれるのだが、確立の一つの目安は、生涯の進路を選択し決断することにある。[60]ところが、大学卒業時に十分な決断ができない人が増加している。

本来の自分なりの生き方は、学問研究に向かう人もあるが、そういう学生は今も昔もそれ程多くはない。多くの学生はスポーツにうちこんだり、文化系サークル活動をしたり、趣味に生きたりということになる。[61]また今日は義務の多い正式クラブよりは、気軽なサークルの方が好まれるといわれ、二つ三つと兼部をしている学生が多い。またどのような名称がついたサークルであっても、テニスをするといった具合である。このことは、学生が自己実現させてくれる少人数の交わりを求めているのである。国際ナビゲーターは学内に、モダンな名称をつけたこの種のサークルを

形成し新しい人にとどくことに成功している。桜井哲夫は、それらを退行の場としてのサークルとよんでいる。学生たちはとくに何かをするというよりは自分自身を甘えさせてくれる場を求めているのだという。[62]

また学生の最近の傾向としては、外に向うよりはより内向的であることがいわれている。他の国々に比較した青少年意識調査によれば、日本の青年の国家に対する意識はきわめてうすく、国家のために働こうとする意識も大変低い。自分自身をみつめる傾向が強いのである。これは、かつてのような大集会形式には、それ自体では若者がそれほど関心を示さないという事実につながっていると思われる。

さらに、自らうちこむものをもたないスチューデント・アパシー[63]となる者や、ノイローゼさらには、神経症・うつ病・分裂病などにかかる者がふえている。それらは専門家を必要とし、境界をみきわめることが大変むつかしいのだが、こうした人たちとのかかわりに多くの時間をさかなければならなくなってきているのが、最近の伝道の現場の徴候でもある。

宗教意識に関しては、一般に既存の伝統的宗教には無関心であるが、室生忠によれば新・新宗教に走る若者は少なくない。彼によると、新・新宗教にひかれる青年層が、多くの場合、不安定な精神的悩みを背景にもつのである。不安定な精神的悩みというのは、戦前・戦中・戦後にみられたような「貧・病・争」の悩みではなく、実態のつかみづらい、今日的不安ともいえる、漠然とした不安が加味されているという。「高度消費経済社会にただよう難民」とさえよばれ、経済的・物質的豊さを背景として育った若者像がそこにある。生きることの新鮮さ、自分への確信、そのことからくる感動という、ごく初歩的な感動を失った彼らが、感動や驚きをもとめて、新・新宗教に走るというのである。[64]

その他・両親から精神的に自立することが遅れた学生、兄弟や姉妹の少ない時代に生まれ育ったことなどをその背

景に、他の人と人間関係をつくったり、協力関係をチームでしたりということがしにくい学生がふえている。他人のいうことは聞けないといった若者像がある。[65] こうした傾向はグループを通じての伝道には、マイナスの要素となるのである。

以上極めて大まかに、学生の徴候をみてきたのであるが、いうまでもなく、これらは個人差があり、絶対的ではなく、全体的な傾向をさすものである。

(二) 方策

a 霊的覚醒

どのような方策にも先だって今日最優先されなければならないことは、伝道の従事者が目ざめて、生ける神の信仰に生きることである。他の伝道同様、学生伝道もまた、ごく一握りの、神を信じ委ねきったキリスト者から始められたのである。あのケンブリッジのチャールズ・シメオンが受難週に、旧約聖書のいけにえについての本を読んでいたとき、自らの罪を他のもの、すなわちイエス・キリストのうえにおくことができることに気づき覚醒された時、あのケンブリッジの霊の潮流ははじまり、後のケンブリッジ・セブンとよばれる宣教師や多くの霊界のリーダーを生み出していったのである。[66] その出発点は、知っているはずの神の知識に覚醒させられ、神が心に住み、深いレベルで神の声に聞いていったことにある。人生を神にあけわたしたとか、委ねたとかといわれるが、それ以前にそれ以外の道を考えられない程、神との交わりが現実的であったのである。今日あらゆる物がみちあふれ、豊かで、またその気になればどんな方策もたてうるような日本の状況で、このような覚醒が先ずもって必要だといわねばならない。

カナダIVCFの総主事で、かつ、アメリカIVCF総主事、初代IFES総主事を歴任したステーシー・ウッズ

の学生伝道の始まりは、カナダからの招聘を祈りもせずに拒否したことを悔い改めることから始まった。[67]今日、計画を綿密にたて、準備は周到にしても、それが果して全能の神のみこころであると確認し、確信して歩む者はどれ程いるだろうか。

C・Sルイスが、はじめて神に心を開いたのは、バスの中のことであったといわれ、ジョン・ストットが個人的回心の経験が与えられたのは彼の学校の寮にいたときで、ベットぎわにひざまずき、罪を告白して祈ったのである。[68]

私はここで成功物語をひき合いに出しているのではなく、その人たちの歩みに、日常生活の中で、真に神を神とする覚醒があったことを強調したいのである。

生ける神を伝えることができるのは、生ける神を知り、そのお方とともに歩む人である。学生伝道はこの生ける神を伝えるものであるとすれば、先ずキリスト者の覚醒が必要とされるのである。聖霊のお働きを待ち望んで祈ることから始められるのである。

b 救霊への交わり

ミカエル・キャシディーは「大学生の間における伝道」という、ローザンヌ世界伝道会議の発題の中で、学生伝道の戦略のいの一番に伝道のための交わりが築かれるべきことを挙げている。[69]何故なら、それが新約聖書の伝道であるからである（使徒二章四二～四七節）。

その交わりは、そこからそれぞれが学内で会う人たちのところに出かけていく交わりであり、学内に神が各々を置いて下さっているところの使命を確認する交わりである。またその交わりは、未信の友を仲間として加えていく交わりでもある。信仰は一つであるが、人はさまざまである。複数の交わりは、未信の友が信仰の本質は同じでも、自分

は自分でよいとことを知るのを助ける。マン・トゥ・マンのやり方は集中できてよいが、複数の交わりは個人的制約にしばられないで伝えることができるのである。

またその交わりは、より幅広いクリスチャン活動をして、広範囲にキャンパス内にとどく可能性をもっている。

交わりを通じての伝道で今日重要なことは、使信を伝えるとともに、相手をうけ入れ、その語ることに耳を傾けることである。人はうけ入れられて始めて心を開くものであるし、自らの言うことを語り終えて後始めて、こちらの語ることを聞き出すからである。豊留真澄が、耳の伝道を重んじ、フォロー・スルーの必要性をとくのも、[70]相手のキリスト教にとび込めない深い事情を知ることなしに、語り続けることのないためである。

継続的な交わりが日本の伝道には必要である。[71]すべての人にトラクトを渡すような伝道とともに、私が継続的に会う人への伝道は、特別に私にたくされた伝道で、これに集中していく必要がある。クリスチャンの交わりはこの継続性を励ますものである。

宮崎医科大学聖書研究会は、一九七五年頃始まったグループで、新設医科大の学校の歴史とともに歩んできたが、地方都市郊外にあって、ほとんどが下宿生で、夜なども交わりをもち易い環境であった。毎朝学内で祈り会がもたれ、週一回の聖書研究会という活動により、各学年一〇〇名という少数の学生の中から、毎年のようにクリスチャンになる者がおこされていった。これは定例活動以外に交わりが継続的にもてたことが大きい。

東京などの巨大都市の大学では、事情は異なり、週一回の集まりをするのが困難なほど共通の時間がとりにくく、交わりがもちづらい。小さいサブグループをつくるなど、工夫が必要である。

グループを形成することは、しかしながら万能ではなく危険もともなう。スピリットを失ったグループは、あの桜井のいう、単なる退行の交わりに堕しやすい。サロン化して、学内にでていくでもなく、集まるための集まりになっ

ていくのである。この場合、一人一人が明確な信仰の確信をもつようにされ、神との関係が回復されていく必要がある。ここでも、生きたグループは、名目上のクリスチャンも覚醒させることができることをおぼえる必要がある。

全国の各大学の中に、生きた、キリストを証しする交わりがおこされるよう祈りたい。

c各大学に合う方策

一口に大学といっても、短大から、大学院まであり、年令や思考形態も一様ではない。短大は、二年周期で人が入れかわるので、継続的なグループを形成しにくい。しかし、女子の場合とくに、急成長するグループがおこされるのも事実である。ふつう大学の規模は小さいので、二年間でもその影響力は全学に伝わりやすいのである。キリスト者の教師、近隣教会の牧師が顧問となり、よきアドバイスを与えることができると効果的な働きができる。まとまったプログラムを提供したりする必要もある。

四年生大学においても、短大と同じようにグループの継続性をもつことはやさしくはない。学内でもたれる聖書研究や講演会・映画会にくる人はほんの一部で、こちらから出ていかなければ伝道は仲々すすまない。マンモス大学程そのグループは目立たない。

ここで必要なことは、四年制大学といっても、それぞれは千差万別で、その大学にあった方策をみい出さねばならないことである。こうした研究がまだまだ遅れている。地方都市の大学では、近隣の一～二教会との協力で継続的な実績をあげたところもある。町のひろがりが大きくないので、接触しやすいこともあるだろう。[72] 信州大学や北海道大学は、比較的全国から学生が集まってくるが、その心理的背景を掘り下げたアプローチは有効のように思われる。

また八王子には二〇の大学が集中して、その教員は三、二〇〇人を数えている。[73] 郊外へ大学が移転してきたためであるが、八王子にある教会が協力すれば組織的なキャンペーンを起こすことができるかも知れない。

その他校風や学生の気質なども地理的・社会的環境も考えに入れたプログラムがあみ出されていく必要がある。何といっても、手をこまねいているような形なのが巨大都市のマンモス通学型大学である。

大学院生や教官への伝道も未開の分野である。研究者の伝道もとりくまねばならない。研究者の集いのようなものはあっても、大学院生伝道のアプローチはまだない。これまで、生けるキリスト者との個人的交わりで、信仰に導かれた大学院生や教官のあることから、やはり、その分野に信仰に生きた研究者をおくりこむことが近道である。かつて英国のUCCFは、どの神学部にも、福音的な教授をおくりこむヴィジョンと祈りをもったが、今日の日本にはどの大学にもそうした教授や研究者をおくりこむ祈りが必要である。また、福音主義神学がほりさげられて、福音主義の研究者が支えられることも、忘れてはならない。

d福音提示の方法の研究

現代の若者は感性が豊かで音楽伝道などもよいプログラムを提示すれば可能性は大きい。逆に間に合わせのようなプログラムは、世俗の方がそうした点では技術的に進んでいるだけに、かえって陳腐なイメージを与えてしまう。

映像時代の子たちへの伝道であるから、原理研の専売特許の感があって用い方にひと工夫いるのだが、ビデオによるプログラムはもっと開発されてよい。ビデオをみた後聖書をひらいて話し合うことは効果がある。

よい映画も必要である。

また、先頃の調査で、五年前に比べて中学生が記憶力は上昇しているが、思考力・統合力などが劣っているということが明らかになった。五年後には彼らは、大学生である。そうした傾向に合わせた福音提示の方法の開発がまたれ

る。

e中・高・大の一貫した伝道を

ノールウェーNKSS、[74] フィリピンIVCF、台湾CEF、[75] 香港FES[76]などの学生伝道団体では、大学生伝道のみでなく、高校生伝道・中学生伝道をも手がけ、一貫した活動を展開している。これは、地理的制約やスタッフの数や経済的制約にも関わりがあることであるが、日本の学生伝道も理想をいえば、中学・高校で入信した者が大学で整えられて伝道をするともっと強力な伝道が展開できるに違いない。受験体制のために、現在の中学・高校は、伝道しにくいところとなっている。大学生伝道とともに、もっと若い中高生の伝道がすすめられねばならない。先駆者であるHiBAやCSK[77]から学ぶことは大であると思われる。またこれらの中・高・大の学生伝道にたずさわる者のシンポジウムは有益である。

fさらに

以上の他、学生伝道がすすめられるためには、広い裾野が必要である。学生一人一人の背後には家庭があり、その家庭にかかわる社会がある。日本的土壌の中でキリスト者が証しし伝道していくためには、ねばり強さとともに、福音信仰にたった様々の答えを用意していく必要がある。

また学内では、異端や異教のチャレンジがあり、無信仰者や異なる信仰をもつもののチャレンジがある。それらにも聖書をもって答えていく力がつけられねばならない。

学生伝道は、投資的側面が強いので、これに投資する卒業生や大学生伝道支援者がおこされてこなければならない。

ミカエル・キャシディは先述の発題の中でその他、マルチメディア、訪問伝道・伝道講演・シンポジウム・地方教会伝道集会・クリスチャン家庭・文書・音楽・ドラマ・学生センター・全学一斉伝道などの戦略を紹介している。[78] その中で、開かれたクリスチャン家庭は、大学生に伝道にことに有効であると思われる。大学生伝道に重荷をもち、大学生を理解してうけ入れる開かれたクリスチャン家庭の多くおこされることを願うものである。

それにしてもキャシディも指摘するようにヴィジョンと方策がいくらあっても、実行に移されなければ何にもならない。[79] あれこれ整ってからというのではなく、できることから、あるものからどんどん進められていかなければならない。学生伝道はそれ程急務なのだから。

注

① 龍谷大学のようにその創立を江戸時代初期にさかのぼり、何百年という歴史を数えるものもないわけではないが、ふつう大学は明治とともに開設されたとされる。それらの出発点は江戸末期の私塾的な学校や明治初期の洋学校である。日本の大学の特徴は、語学や医学・工学などの実学を軸として発展していることであり、神学・哲学を軸とした西欧とは成り立ちを異にしていることである。

② 日本基督公会創立の主要日本人は、小澤三郎著『日本プロテスタント史研究』（東京・東海大学出版会、一九六四年）にまとめられていて、それによれば二十名である。このうち半数が士族出身であり、これらの人たちは今日の学生にあたると考えられてよい。八四～八五頁。

③ 山森鉄直著『日本の教会成長』（東京いのちのことば社・一九八五年）四〇頁。

④ 小澤三郎 前掲書 八七～九四頁。

⑤ 柳田友信著『日本基督教史』三六頁。

⑥ 同上 三九頁。

⑦ 同上　七四～七九頁。
⑧ 同上　七〇～七三頁。
⑨ 山森鉄直 前掲書 四六～五一頁。
⑩ 同上　五五～八四頁。
⑪ 小澤三郎 前掲書 二四～二七頁。
⑫ 奈良常五郎著『日本ＹＭＣＡ史』（東京、ＹＭＣＡ同盟出版部、一九五九年）二九頁。
⑬ 同上　四八頁。
⑭ 同上　六一～六九頁。
⑮ 中原賢次著『基督者学生運動史』（東京・日本ＹＭＣＡ同盟出版部、一九六二年）。
⑯ 森野善右衛門他共著『学生伝道の手引き』（東京・日本基督教団学生伝道委員会編、一九六八年）三〇頁。
⑰『森明著作集』（東京、基督教共助会編・新教出版社、一九七〇年）五～六頁。
⑱ 鈴木淳平『沢崎堅造の信仰と生涯』（東京、飯沼二郎編・未来社・一九七四年）一〇一～一〇七頁。
⑲ Inter-Varsity Christian Fellowship Philippines. フィリピンの福音主義学生運動。約五〇名の主事が、各地で働いている。
⑳ International Fellowship of Evangelical Students 福音主義にたつ学生運動の交流団体で、主としてヨーロッパにて自由主義にたつ学生運動などとの緊張関係をもつ前史をもった後、一九四七に結成された。ＫＧＫは一九五六に加盟している。一九八六年八月現在世界の七二カ国が加盟及び準加盟しており、アジアでは、九カ国がこれに加わっている。
㉑ 一九七一年のもので、この年、マガリトはＩＦＥＳ東アジア地区副総主事に就任している。全文はタイプ用紙四枚からなり、真にキリストに献身をしたキリスト者が学生界から出て各界でキリストの栄光あらわすようにとの内容となっている。
㉒ 依田新著『青年心理学』（東京・培風館・一九六三年）四五頁。
㉓ 山森鉄直 前掲書 一八七～一九四頁。
㉔ 一九七三・七四年度の世界ルーテル連盟マス・メディア研究所による『受洗者動機調査・報告』によれば、男性では十代二十代の受洗者は七四・四％、女性では六〇・三％であった。このうち中・高・大・専門学校のいわゆる学生は、全体に対して男三八・五％、女二一・六％であった。大学生のみは男女とも八％を占めるのみであった。これは、ルーテル教会の分布も考慮しなければならないけれども（大学のない町にある教会も少なくない）、尚高い比率で若い人が信仰に導かれていることと、その約半分は学生であることを示している。一～七頁。
㉕ 関西大学ＹＭＣＡはこの時期百名をこす大学生が集っていたことが知られている。他の地方都市の大学や、ＹＭＣＡ経営の学生寮など幅広い活動があった。
㉖ 森野善右衛門 前掲書 三二頁。
㉗ ＹＭＣＡは参加者の自主運動的形態をとっており、信仰者でなくても指導的位置を占めるようになり、その活動も聖書研究から読書会に、また文化研究や社会問題研究などに転じた。一九七六年北九州大ＹＭＣＡは主たるメンバーが統一教会の信者であった。
㉘ 中原賢次著 前掲書。
㉙ ＹＭＣＡもともとは、学生や青年に伝道をすることを目的として出発した。奈良常五郎著 前掲書 二九頁。
㉚ 尾山令仁著『生きて働かれる神』（東京・羊群社・一九八〇年）一九～三二頁。同『さすらい』（東京・羊群社・一九六〇年）一三一～一三二頁。
㉛『学生の伝道一九七七』（東京・キリスト者学生会・一九七七年）四～一五頁。また関西地区の歴史については唄野隆他共著『責任ある伝道』（大阪・キリスト者学生会・一九七〇年）五～一八頁。
㉜『学生の伝道一九七七』一八頁。ＩＦＥＳについては、Douglas Johnson, A brief history of International Fellowship of Evangelical Students (Lausanne: The International Fellowship of Evangelical students, 1964) や唄野隆・太田和功一共著『福音主義学生連盟の歩み』（神戸ルーテル神学校神学誌第5号収録、一九七三年・七八～八九頁）に詳しい。
㉝『学生の伝道一九七七』六四頁。第一条が聖書論となっており、二条以下が内容原理で、三位一体、キリスト論、人間の堕罪とキリストの贖罪、信仰義認及び新生・教会となっている。ＹＭＣＡなどのエキュメニカル運動との接触から、保守的福音主義信仰にたつことが表明されている。
㉞ ビル・ブライト著『今こそ革命を！』（東京、いのちのことば社・一九七三年）二六〇～二七九頁。
㉟ 同上　二六六頁。
㊱「キャンパス・クルセードのしおり」による。

㊲ 韓国キャンパスクルセードと合同の「エキスプロ七四」。有賀寿著『かごの鳥と見るな』（東京・すぐ書房・一九七五年）はこれを批判的にとりあつかっている。沖縄でもたれた「私も見つけた」（I found it）キャンペーン。日韓合同の指導者研修会（一九八五・八六年）。アメリカ人クリスチャン学生の短期滞在による“Discover Friends”伝道チーム（一九八五・八六）。宇宙衛星中継を用いての米日合同修養会（一九八五年）。また教会向けには、「いのちの教会」研修会などを行う。

㊳ Betty Lee Skinner, The Story of Dawson Trotman Founder of The Navigators (Grandrapids: Zondervan Publishing House 1974) に詳しい。たとえばドウソン・トロットマンの初期の働きである“International Fisherman's Club”では、㈠毎日一時間祈る㈡毎日聖書を読む㈢一人の魂と毎日接触をもつ㈣一週間に一回は伝道の旅行をする。㈤少年を訓練する。㈥新約聖書を常時携行する。ヨハネ伝のトラクトも。㈦一日一節の暗唱聖句といった訓練プログラムをもっていた。六五頁。このスピリットはこの団体を一貫している。

日本語では、ドウソン・トロットマン著『行って実をむすべ』（東京、クリスチャン文書伝道団　一九六七年）がある。

㊴『国際ナビゲーターの歴史』（コンピューターにインプットされた出来事史）また、Rashinban（国際ナビゲーターコミュニケーション紙）第一一号による。

㊵ 本田弘慈著『涙にかえて歌を』（東京ニューライフ出版社、一九八六年）二三九～二四二頁。

㊶ これらというのは、帝塚山学生センター（ルーテル系、大阪）、六本松福音館（ブレズレン系、福岡）など学生センターとして出発したところは少なくない。本田弘慈著『日本伝道の手がかり』（東京、いのちのことば社、一九八二年、一一〇～一一一頁）には、浜松のイエス福音教会と学生伝道のかかわりが記されている。

㊷ 森野善右衛門　前掲書　三四～三六頁。

㊸『多摩ニュータウン教会十年誌』。

㊹ この他、かつて西宮福音教会は関西学院大学生のための寮をつくり、伝道・訓練して、実績をあげた。

㊺ 祈りに熱心な教派、体験を強調するグループ、聖書研究を最優先する教会。伝道熱心な群れ等々。

㊻ 筆者のみてきたところでは、アルメニアンとカルビニストの教会を往復したすえどちらの教会にも行かなくなった人。また御霊の賜物、きよめの信仰をめぐって迷う人など。

㊼ 田口良子他共著『責任ある伝道』二九～三〇頁（前掲書）

㊽ 同上　三八頁。

㊾ 使徒行伝二章四四～四七節。エペソ書一九～二二節。三章一六節。

㊿ 長島幸雄『日本をキリストへ・日本伝道会議講演集』（日本福音同盟、一九七四年）一七〇頁。

(51) 和木孝男によるレポート。一九八〇年。この資料はレポート用紙二枚の簡略なものであるが、この種の資料は極めて少なく、貴重なものである。

(52) 長島幸雄　前掲書　一七一～一七三頁。

(53) 教会から伝道団体によせられる注文の中に、「伝道団体はもっぱら伝道をすべきであり、訓練や牧会は教会の領域であるから、差し控えるように」ということがある。このことは正しい発言である。しかし、このことは言葉の上では分類できたとしても、伝道と教育は不可分な面がある。ふつう伝道団体がしていることは、福音のできごとの宣言とともに初歩的ないし基礎的な教育を手がけている。たとえば聖書の読み方、祈り、信仰生活のおくり方など。

また牧会面では、求道者、ないしは初期の信者の質問や必要に応じることなどである。当初与えられた接触のゆえに、信仰者としてかなり日数のたった人の相談をうけることもある。

このような場合、学生伝道団体に属する者は、常に教会に仕える自覚をもちつつ、教会とのよい信頼関係を築きあげていく他はないのである。

(54)『わが国の教育水準（昭和五五年度）』（東京　文部省　一九八一年）付九八～九九頁。

(55) 同上　付六四～六五頁。

(56) 一九八一年KGK全国協議委員会の調べでは、全国に二一九の学内聖研があった。国際ナビゲーター・キャンパスクルセードを合わせても三〇〇をこえないと思われる。また各地にあるミッションスクールの宗教部も伝道よりは教育の一貫と考える傾向が強く、ほとんど伝道活動はなされていないのが現状である。

(57) 学校基本調査（速報）、文部省・一九八六年八月一一日付朝日新聞夕刊による。

(58) Inter Varsity Christian Fellowship から University and College Christian Fellowship へと名称を変更した。ちなみに、フランス・イギリス・西ドイツの高等教育機関進学率は二〇％代で横ばいである。マーチン・トロウによれば大学がエリート教育機関であったのは一〇％以下の時代である。

⑤⑨ 森野善右衛門他共著 前掲書 一二～一四頁。

⑥⑩ 村瀬孝雄『現代学生における自己確立の諸相』(『キャンパスの症候群』笠原喜・山田和夫編 東京・弘文堂・一九八一年) 三～三一頁。

⑥① 本橋信宏著『ザ・キャンパス八六』(東京 ミリオン出版社 一九八六年) には学生生活を面白おかしくおくるためのハンドブックというサブタイトルがついているが、そのようなニーズに応えようとするものであろう。

⑥② 桜井哲夫著『ことばを失った若者たち』(東京 講談社 一九八五年) 二一四～二一六頁。

⑥③ 笠原嘉著『青年期』(東京 中央公論社 一九七七年八七～一〇一頁。『キャンパスの症候群』(前掲書) 一四三～一六六頁。

⑥④ 室生忠著『若者はなぜ新・新宗教に走るのか』(東京、時の経済社・一九八四年) 一六二～一六五頁。室生はこの本で、原理研・ものみの塔・聖霊のバプテスマ (異言)・阿含宗・新響会・ラジーニ瞑想センター などをあげている。これらの多くは徹底した教えと行動もしくは体験を重視している。福音主義のものは経験や感性の神学が不統一であったり不十分であるように思われる。

⑥⑤ 桜井哲夫『前掲書』二〇六～二〇八、二一〇～二一二頁。

⑥⑥ J. C. Pollock, A Cambridge Movement (London: Jhon Murray 1953) pp. 2～3, 71～89.

⑥⑦ C. Stacy Woods, The Growth of a Work of God (Downers Grove: I.V.P. 1978) pp. 15～16.

⑥⑧ Richard Peace, Small Group Evangelism (Downers Grove: I.V.P. 1985) p. 124.

⑥⑨ Michael Cassidy, Evangelism among College and University Students. ((Let the Earth hear His voice, editecl by J. D. Douglas)) (Minneapolis: World Wide Publications 1975) p. 755.

⑦⑩ 豊留真澄著『心と心の伝道』(東京 いのちのことば社 一九七〇年) 九四～一五七頁。

⑦① 唄野 隆 前掲書 四四～四五頁。交わりによる伝道については『学生への伝道』(大阪 キリスト者学生会 一九七〇年) に詳しい。

⑦② 宮崎大・山口大・山形大・弘前大などで長年よい働きが続けられた。

⑦③ 『わがまちはちおおじ』」Vol. 3, No. 2. 一頁。

⑦④ Norges Kristelige Student-og Skoleungdomslag の略。ルター派がほとんどの福音主義学生運動で、その名称から中等教育機関も働きの対象であることがわかる。

⑦⑤ Campus Evangelical Fellowship 校園福音團契 東アジアでは規模は最大の学生伝道団体、五十名余の主事の他、福音書籍出版、聖書学院を運営する。

⑦⑥ Fellowship of Evangelical Students この他タイの Thai Christian Fellowship も高校生伝道部門をもつ。

⑦⑦ Highschool Born Againers 略史などは、『主に導かれて、Hi・B・A三十周年記念誌』(東京 Hi－BA高校生聖書伝道協会 一九八一年) 五、六九頁。
CSK・中学生聖書クラブ協力会の略、『CSKとは何か』(東京 CSK)。

⑦⑧ Ibid., pp. 756～759.

⑦⑨ Ibid., p. 756.

(キリスト者学生会総主事)